

## カレンダーボックス

土 谷 良 巳\*

カレンダーボックス (Calendar-box) あるいはタイムテーブル (Time-table format) などと、英語圏でもことばはいくらか違っていますが、ここではカレンダーボックスとして、図1, 2, 3, 4のような「教材」を紹介します。

養護学校に限らず障害のある子どもの教室では、一日の日課が絵、写真、絵文字、文字などを用いて黒板に示してあるのは珍しいことではありません。多くの教室では、朝の会でその日の一日の予定を説明したり、確認しながら、一繋がりの日課表を構成する活動に取り組んでいます。構成する作業の一部が子どもたちの課題となっていたり、その日の給食のメニューを話題にすることは、どこの教室でも見かけることです。

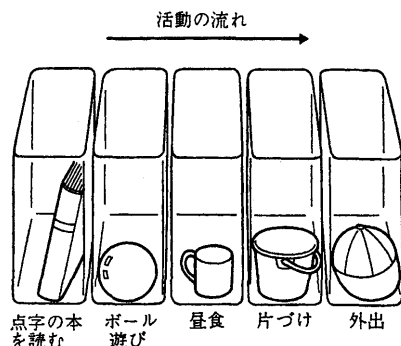


図1 カレンダーボックス (A)

このような日課表の言わば原形が、ここで紹介するカレンダーボックスなのです。欧米の障害児教育では、障害の重い子どもの教育の場、とりわけ文字では十分なコミュニケーションがとれなかったり、見る力が弱い子どもの場合には、どこでも図に示したようなカレンダーボックスが、一人ひとりの子どもに用意されていることが、当たり前のこととなっているようです。

### カレンダー・ボックスとは

カレンダーボックスは、先天的に視覚と聴覚の両方に障害がある子ども（いわゆる先天性盲ろう児）の教育の場で、開発されました。オランダの van Dijk という研究者であり教育者でもあるひとが、その開発に深く関わっていると聞いています。

生まれながらに視覚と聴覚の両方に障害があると、目と耳を使って外界からの情報を摂取することが極めて制約されること、多くの人々の通常のコミュニケーション手段である音声言語や文字言語が使えないことから、コミュニケーションと移動とにたいへんな困難が生じます。そのことは、周囲の状況との繋がりを保つことがたいへん難しい状態であるとも言えます。

この子どもたちはまた、いわゆる時間概念をもつことが容易ではないとされてきました。時間概念というと、「時計の針の読み方を教えること」とおもわれたりもします。またその発達もいろいろと研究されています。しかし、生まれながらに見ることも、聞くことも困難な子どもたちに、音声言語でのコミュニケーションをとらずに、また文字や絵を使わずに、どうやって教えたらいいのでしょうか。

そのヒントは、時間概念の始まりは、これから（あるいはその日に）取り組む活動の順序に、子ども自身が気付いたり、理解したり、見通しをもつことであると考えたことでした。それを視覚や聴覚に頼らずに、どう実現させるか。

その答えは、モノの手がかり（オブジェクト・キューと呼ばれることが多いようです。）を使うことでした。まず子どもがだいたいルーティンとしている活動を選び、その活動を意味するモノの手がかりを用意します。それぞれの活動で実際に使用するモノ、もしくはそのモノの一部で手にする部分（例えばカサならその握る杖の部分）が都合がよいようです。モノであれば触覚を使って、なんであるかを捉えることができます。また実際に使うものであれば、手がかりとして分かりやすいはずで、例えば食事の場合はスプーンが、外出

\* 上越教育大学学校教育学部附属障害児教育実践センター

には靴や帽子が、学校へ行くにはその時に使うカバンがオブジェクト・キューとして考えられます。

### 構造化と分かりやすさ

このオブジェクト・キューを活動の順に箱に入れて並べます。蓋を付ける場合もあります。ある活動をする際にはそのオブジェ・キューを手にとってから活動に向かいます。その活動が終わったならそのオブジェクト・キューを箱のものとの場所に戻し、場合によっては蓋をして、その隣の箱のなかに手を入れます。そのとき手に触れたオブジェクト・キューが、次に取り組む活動になります。

このようにすることで、見ることも、聞くことも困難な子どもたちが、取り組む活動の順序を理解するようになります。次に何をするのか分からないまま（係わり手からすればどう伝えてよいか、分からないまま

ま）、次の活動に手を引かれて連れて行かれるような状況から、子どもが自分から箱に手を伸ばし、オブジェクト・キューを手にしてその活動へ向かう、というような場面が見られてきました。

また、箱に入って並んでいるオブジェクト・キューをひとつおとり触ってみることで、その日の活動全体のメニューを子どもが知ることができますし、一日の終わりに、同じようにすべてのオブジェクト・キューを触ってみることで、その日の活動を振り返ることもできます。ある活動を終わりにする場合、そのオブジェクト・キューを箱にしまう、蓋をするということで、より分かり易くもなります。

そのためには、子どもが係わり手とともにカレンダー・ボックスのある場所へいかなければなりません。子どもが何か活動をしていてその場所を離れようとはしない場合など、カレンダー・ボックスを子ども

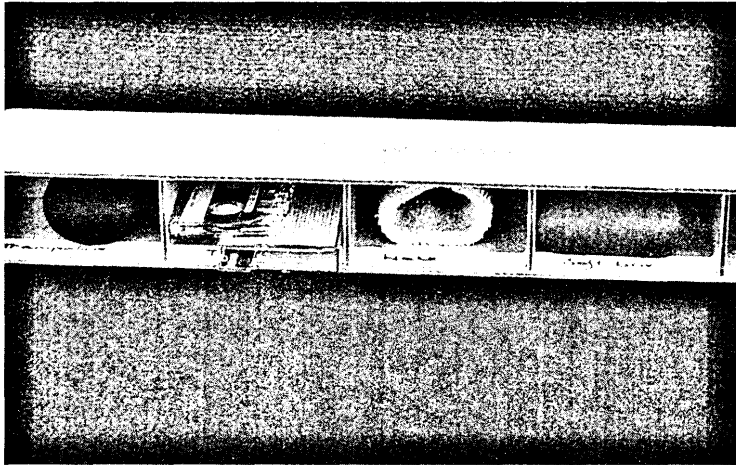


図2 カレンダーボックス (B)

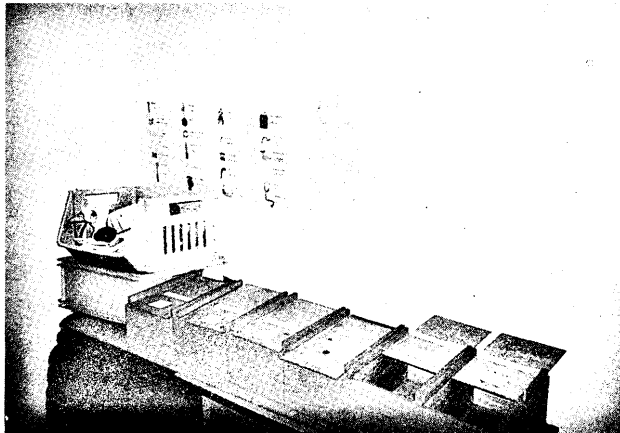


図3 カレンダーボックス (C)

の側へ持っていくなどの工夫が必要になることもあります。その場合はあまり大きなカレンダー・ボックスでは使いにくいかもしれません。

やがて子どもが一週間の予定を理解できるようになれば、図4に示したようなカレンダー・ボックスを使うこともあります。これは引き出し式になっていて、一つの段が曜日を表しますので、7段の引き出しになっています。そして左から右へと活動が順序づけられているわけです。

#### 見通しをもつことと落ち着いて活動すること

このような分かりやすさが、子どもが自分が取り組む活動への見通しをもつことを支えます。また見通しをもつことで、子どもは安心して落ち着いて行動することができるようになり、その子のもっている力を存分に発揮する下地ができるとも言えるでしょう。分かりにくさはときに不安と混乱をもたらします。そのような場合には、自分の持っている力を十分に発揮できないことは、私たちが誰でも経験していることではないでしょうか。

#### 手続きを共有するコトバへ

このカレンダー・ボックスは、教材あるいは教具といえますが、むしろ子どもと係わり手が共有するコトバである（コトバになる）といった方が適切でしょう。確かに最初は、カレンダー・ボックスの手続きを子どもは学習する必要があります。また多くの場面で、係わり手が子どもに「次に子どもには何が起きるのか。」「係わり手は子どもに何をしてほしいのか。」を子どもに伝えるために、カレンダー・ボックスが使われることでしょう。そのことが子どもの分かりやすさをたす

けることは、すでに述べたとおりです。この状態が高じると、カレンダー・ボックスは、係わり手が子ども（の行動）をコントロールするための、便利な道具となりかねません。子どもの分かりやすさは増えたものの、子どもは受け身の状態のままということになりかねません。

しかし実際にこのカレンダー・ボックスを使ってみると、子どもがこのカレンダー・ボックスの意味を理解するにしたがって、子ども自身が、このカレンダー・ボックスをつかって、係わり手にものを言うようになる場合があります。例えば、子どもがカレンダー・ボックスの中に入ったものを取り出して放り投げてしまったり、箱の中身を互いに入れ替えてしまったりすることです。前者はその活動を子どもがやりたくなかったからであり、後者は好きな活動を先にやりたかったからだと考えられます。

このとき、子どもは真にこのカレンダー・ボックスを使えるようになったと言えます。係わり手からのメッセージを受け取る（受信する）だけでなく、係わり手に自分の思いや考えを、カレンダー・ボックスを使って伝えようとした。つまり子どもからみても便利なコトバであることが、分かったということではないでしょうか。それまでは分かりやすさにたすけられて、スムーズに活動に取り組み、活動を切り替えるようになった子どもが、自分を主張するためにカレンダー・ボックスを使い始めたわけです。このとき係わり手と子どもとは、カレンダー・ボックスというコトバを共有したのです。

#### カレンダー・ボックスと教育の新たな課題

この事態はときには、係わり手の考えと子どもの思



図4 カレンダーボックス (D)

いがぶつかり合うという、穏やかではない場面ともなります。係わり手はどうしたらよいのでしょうか。わたしはこのような事態が、話しコトバをもつことが困難な障害の重い子どもの教育の場に生じることに、喜びを感じています。それが簡単に解決できる場合ばかりとは限らないことは百も承知です。先生方が困って

しまうことも多々あることでしょう。でもこの事態を教育的に意味があるように解決するための努力を続ける先に、新しい障害児教育の地平が拓がるのではないかと、大げさに言えばそのようなことを考えています。皆さんはどうお思いでしょうか。いちど、このカレンダー・ボックスをためしてみてはいかがでしょうか。